若きグッドマン・ブラウン転じては中年のウエイクフイールド

鵜　木　奎　治　郎

I

誰もが言う通り所謂 The New Humanists に属する典型的な批評家の More は，あまりにも倫理観に溢れた眼で N. Hawthorne を見ているのかもしれない。彼は突如として，たまたま彼自身が the Alps を歩いていたある日曜日の朝耳にすることになった，感動的なある牧師の説教を紹介しつつ，"The Solitude of Nathaniel Hawthorne" なる論文を書き始めるのだ。「文学の批評をするに当って，こんな個人的な体験の記憶を以てすることについて寛恕を求めたい。だがホーソーンのこの作品の特質を指示するに当ってこれに勝る方法はない様に思われたのだ[1]。」この告白は所謂テキストに密着する新批評の立場に与するものでもなく，又伝記批評の立場をよしとするものでもない，あくまでも個人的体験に触発された上で，形式的には類比的に，実質的には解釈学的に批評する独自の立場を表明したものだと言える。More が「思われたのだ」と過去形で示した通りに，ある Hawthorne の作品についてのある時点に於ける解釈は現在という異った時点からやり直してみると，又別な角度から成立し得るかもしれないのである。この視点に立つ限り More の Hawthorne 解釈は，少くともその解釈の態度は今一度現在という時点から再考すべき価値がある。今暫く More の云う所を傾聴しよう。

Often while reading his novels I have of a sudden found myself back in the little chapel at Interlaken, listening to that strange discurse on the penalty of sin, and the cry of the text once more goes surging through my ears, "Why hast thou forsaken me?" Truly a curse is upon us; our life is rounded with impassable emptiness; *the stress of youth, the feebleness of age,* all the passions and desires of manhood, lead but to this inevitable solitude and isolation of spirit.[2] (*italic* Unoki's)

そして More はその実例として， Hawthorne の処女作 *Fanshawe* (1828) に青年客気の野望故に生じた孤独の典型を，晩年の作 *The Dolliver Romance* (1864) に老残の孤独の典型を発見する。ひいては Hawthorne の全作品は凡て人間存在の孤独性という主題で浸透し尽くされていると解釈するのだ。これ程人間の "moral depth" に到達した人なのに宗教問題には冷淡そのものであると[3]した More の指摘には必ずしも賛同できない。しかしこの態度はおそらく「ホーソーンはニュー・イングランドの道徳的理念が良心より想像力の領域に移ろうとした時に登場した，そして緩慢ではあるが退廃した崩壊の過程に直面したのだった[4]。」という主旨の， More の別の論文にうかがわれる Hawthorne 観によって

適格に是正されているとみてよいのではなかろうか。私がここで More の論文を冒頭に置いてみたのは，第一に（個人的体験に触発される）という一見正当な文学批評の脈絡を外れるかの様に思われる More の問題提起の方法が，実は現代人の置かれている孤独乃至は疎外という状況にそのまま繋るのだと，まさに私の個人的体験により判断したからに他ならない。第二に，More の挙げた二つの作品であるが，これは青年と老人という二つの極端な年令層に於ける孤独を取り扱っているという点では興味をそそる。しかし彼はこの二作品を一つは処女作であり，他の一つは一種の絶筆であるという理由に基づいて，いわば彼自身が批評する時の着眼点として殆ど無視した筈の "external matters"(5) に基づいて，取上げたのだなと推理してみると，作家論としては面白い試みであったにせよ，作品論としては他にもまだ彼の立論を裏付けるのに，よりふさわしい作品があるのではないかと思わざるを得ないのだ。従って私は More と殆ど同じ視点に立ちながらも，作品の選択に於ては，彼と全く逆の方角をとりたい。即ち More が処女作と晩年の作を取上げたとすれば，私はそれに対抗して若干意識的に極めて継時的な時点に於て執筆された二つの短篇小説をとりあげることにする。つまり，*The American Notebooks* に頼って，執筆時期を克明に調べた Chandler によれば，1828年又は1829年に執筆されたとみられる "Young Goodman Brown"(6)（以下 YGB と略す）と1834年に執筆されたとみられる "Wakefield"(7)（以下 W と略す）とを比較するのが私のねらいである。いかにも執筆された時期については研究者によって若干の異同もあろう。だが YGB が *The New England Magazine* に発表されたのは1835年の4月，W が同紙に発表されたのは同年の5月であったことを考えると，私は少くとも W の方が後から書かれたということ，いわば YGB の続篇が W であり，YGB に於て云い尽くせなかったことを作者は W に於て述べたのだと想定したい誘惑を否むことができない。然も More 流に言うならば，YGB が極めてキリスト教に酷似した悪の反世界を呈示してみせるのに対し，W で描かれた世界は既に神もなければ悪魔もない，そして教会という権威に代るべきものとして，"inner tyranny of conscience"(8)が登場してきただけの，換言すれば権威の中心が "without" でなくて "within" に代ったという変化をまざまざと示してくれるからである。青年時代に執筆された作品が青年を扱い，晩年に執筆された作品が老人を扱っているというのは当然のことである。むしろ不思議なことは1835年，即ち作者が僅か29才の時に雑誌に掲載した二作品が，青年と老人の問題を扱っていたという事実だ。もっと厳密に象徴的に表現すれば YGB に於ては一夜の中に青年が，Waggoner 的に言えば老人に変って(9)，以後死に至る迄老人であり続けたという主題を，W に於ては中年の男がこれも一夜の中に人格が変って（Wakefield is another man.）その儘20年後に老人へとただ馬令を重ねるだけであったという主題を，要するに何れも老人の孤独という主題を取り扱った作品に他ならぬという事実なのである。作者の romance の精神性を一種の実存主義と理解して，実存主義の先駆者 Kierkegaard と比較してみせたのは Waggoner であった(10)が，考えると Kierkegaard と Hawthorne には多くの点に於て本質的類似性があった。両者共孤独に沈潜し，日没後の歩行を好み，生涯罪の意識を問題とし続けながらも，教会や聖書の権威からは厳然と一歩距離を隔てていた。ただ Kierkegaard が Regine を愛の名に於て生涯の伴侶とすることを拒絶したのに対し，Hawthorne は極めて晩婚であったが Sophia Peabody と幸福な結婚を送り得たのであり，この事実が両者の生活態度の差異として注目され

るのである。然し Regine が美女であった様に，Sophia も又美女であった。そして Hawthorne の倫理的傾向からすれば意外と思われる程，彼は容貌の醜い女性を嫌悪する傾向があったという Cowley の指摘(11)を信ずることにすれば，この一見相反する現象面に於ても両者の隔たりはそれ程大きなものではないと言えよう。ひるがえって考えてみると若くして既に老人であると自称した Kierkegaard は Regine を棄てることによって始めてその苦悩を作品の中に昇華してみせることができたが，Hawthorne も Sophia と幸福な結婚をする時点に於て既に老人とまでは言わなくとも，もう決して若くはなかったのである，従ってこういう老人の苦悩を描いた二大短篇を書く事ができたのである。

II

私はこの二作品を比較する作業に移るのだが，類似点を指摘する作業は実は同時に相違点を指摘する作業にもなり得ることをあらかじめ指摘しておきたいのだ。Young Goodman Brown と Wakefield は共に平凡な名前であろう。左表で明かな通り，young は名前ではなく allegorical な形容詞とみるべきであろうが，"Goodman" も "the goodman" の用例で示される通り，必ずしも名前ではなく，allegorical な匿名とみてもよいのではなかろうか(12)。殊に作品の冒頭部に於て "Young Goodman Brown" として文中に紹介されるのは一応当然のことであろうが，結末部に至って，翌朝眼が覚めて Salem village に帰りつくやいなや当人が再び "young Goodman Brown" として再紹介されるのだ。最後の節の，作者独特の moral を開陳する件でも再び "young" である事が次の様に implicit に強調されているのである。

YGBに於ける主人公の名称の回数		
Young Goodman Brown	5	
Goodman Brown	38	
the young man	9	6
the younger		1
a nice young man		1
young man's		1
the goodman	1	

Had Goodman Brown fallen asleep in the forest and only dreamed a wild dream of a witch-meeting?

Be it so if you will; but, alas! it was a dream of evil for *young* Goodman Brown. (*italic* Unoki's)

この一節は，この作品が夢であったか現実であったかの決め手となる場所として批評家達の論点となる個所(13)である。然し私にとっては夢か現実かという二者択一の問題よりも，先ず兎に角 Brown が何等かの体験をなし知識を獲得したことは確実であると押える，そしてそれにもかかわらず，依然として "young" の状態に留まっていたことを指摘する作業の方がより重大である様に思われる。又 Brown 自身が devil と思しき誘惑者（彼自身は "devil" と認めたことはない）に対して自らを "a simple husbandsman" と規定し，尊敬する聖女 Goody Cloyse も彼のことを "the simple fellow that now is" と規定している

事実はどう解釈すべきであろうか。このことは作品中に登場する悪魔・魔女・或いは Brown の祖先達は凡て "old" 或いは "elder" であるとたえず強調されている事実と決して無関係ではあり得ない。要するに "old" で象徴されているものは凡て悟りすました知恵（例え悪しき知恵であろうとも）であるということに気付く時，"young" といい "goodman" といい，愚かさという意味をこめた寓意ではなかろうかと推定せざるを得ない[14]。結局 "Young Goodman Brown" という名称は，単純で伝統的な信仰厚き農夫という程度の意味ではなかろうかと思われる。Waggoner が "The young man who grows old in bitterness is another Goodman Brown."[15] と敷衍した時，果して彼はこの "young" の象徴的意味に気付いていたのだろうか。悪魔や魔女の場合では "old" であることがその儘知恵に繋るにしても，人間の場合には "old" の状態になって知恵を得れば得る程ますます fool になるという paradox がこめられているのではなかろうか。

これに比較して，"Wakefield" という名称の場合はその寓意は明かにすることが難しい。作品の文頭に於て一応 "let us call him Wakefield" と断ってあるからには，登場人物は結局誰でもよいのではなかろうか。彼らの夫人の名称にしたところで，YGB に於ては Faith というはっきりした名称が与えられていたが，今度の場合は単に Mrs. Wakefield と呼ばれるにすぎぬ。Waggoner は YGB や W に於ては "Overt action" に欠ける所があるが[16]，それにもかかわらず，この種の "sketchlike tales" には往々にして傑作があると言う。又，一方複雑な plot の横溢した "Mr. Higginbotham's Catastrophe" はどうしても傑作とは言えないとも指摘する。この Waggoner の意見は "Dominicus Pike" が中年に達して町に落着いた後の姿，つまり Yankee Peddler が Babbitt になったものが "Wakefield" であるとした Schiller の意見[17]よりも，YGB や W の独自性を指摘した点に於て，遙かに正鵠を得たものと言えるが，彼が YGB を W とほぼ同一位相で捕えて "overt action" を欠くものとした見解には賛成できない。ましてや Waggoner は新批評の立場で分析を進める Fogle とは異なって，夢か現実かという様な問題提起が「本当に大切な事か？[18]」と迄一応問うているからである。少く共，原文に即して読む限り，Brown の呪われた一夜の行動は，しばしば見せる彼の狐疑逡巡にもかかわらず，結局誘惑にたえかねて最後は自分で行動を起しているのであり，"Thus sped the demoniac on his course," と作者が表現した程 speed 感に溢れていて行動的なのである。Brown は Wakefield が無気力で想像力の劣しい人間だったのに比べて，想像力が横溢し活気に満ちている。だが，少くとも Wakefield の行為が "overt action" に欠げることは間違いないだろう。作者自身も "without a proper distinction of circumstances" と述べている様に，その行為自体は自己の情況を全く識別せずに（然も形式的には全く自発的に）行われた，全く無意味な行為だったのである。自発的な行為ということと全く矛盾する無意味な動機で事件が起った，そして無意味な結末を辿るだけだったという点にこの作品の最大の irony がある。この作品が Schiller の言う様に Kafka ばりの現代の作品を読むかの様な印象[19]を与えている所以である。これに反し YGB は Fogle の言う通り作者は Brown をそれ自身として描いていない，たえず "in relation to the whole situation and set of circumstances" という姿で捕えているのである[20]。つまり Brown はたえず何ものかに動かされて行動を起しているのだ。一方 Wakefield は Brown と違って環境の奴隷にすらなり得なかった様にみ

える。ところが環境に支配されたかの感のある Brown は，その事実を意識することによって逆に自主性を獲得したとも言える。一方環境を超然と超越したかの感のある Wakefield はその事実を意識しないということによって逆に環境の奴隷となり，自主性を失っていたのである。結婚して3ヶ月後に冒険にでかけた Brown と違って，Wakefield は結婚後既に10年もたってから蒸発したのだ，従ってその時点に於ては既に "the *middle-aged* Mr. Wakefield" (*italic* Unoki's) であったのであり，そしてその儘20年もの間妻を置き去りにしたのである。その間彼の行為は殆ど妻を看視するだけに終始した，はてはその行為にすら意欲を失った様にも見える。そして終始一貫何もとりたてて言う程のことは起らなかったし起りそうになっても抑圧してしまったのだ。せめて Wakefield の20年間の蒸発中の行為は Brown の一晩の外出中の行為と等価であると述べておきたい所だが，実は Wakefield の20年間の行動は質量共に Brown の一晩の行為に劣る事夥しいのではなかろうか。20年間の長期の自我喪失は Wakefield の愚劣さを物語るだけである。行為がそもそも欠如している人間を捕えて，それに具体性を与え得なかったからといって作者を非難する[21]のは的外れであろう。我々が充実した生活体験を経験している時には，その瞬間は時の経つのを極めて早いと感ずる。然し後になって回想してみると過去のその刹邪が驚くべき長時間だったと追憶されるのである。そしてこれこそ正に Brown の場合である。逆に，我々が充実していない生活体験を経験している時には，その時はこの上なく長く感ずるにしても，後から回想するとこの上なく短い空虚な時間であったと感じて，そのことについて何の記憶も持ちあわせていない自己を発見して驚くのだ。これが正に Wakefield の場合である。要するに両者共に，人間とは動物的な空間を意識するよりもむしろ時間を意識する唯一の存在なり，という主題を盛った作品に他ならないのである。Turner は "he (＝Hawthorne)wrote fiction of ideas.[22]" と名言を吐いたが，正にそれだけの理由で W が駄作であるとすべき理由は何もないのだ。Turner は作者が "moral significance in even *the minutiae* of his world." (*italic* Uuoki's) を見つける執念に近い習癖があった[23]と見ている。これは YGB の場合に即して言えば，その "minutiae" 的性格は取りも直さず，たった一晩という（然しながら物理的測定には十分堪え得る）時間の長さに相当すると言えるであろう。又Wに即して言えばあまりにも取るに足りぬ理由に基づく蒸発という（然しながら心理的測定には十分堪えうる）事件に相当すると言えるであろう。最近の Doubleday の研究によって，両作品共にその source が推定されるに至った[24]。然し私にとって最も主体的な興味をそそるのは，source 探しよりもむしろ Wakefield の性格類型の方である。これは Schiller の言う通りに Hawthorne の作品群の中では極めて特異なもの[25]である。或いは Waggoner の言う通りに，*The American Notebooks* の中でもこの作品にぴったりあてはまるメモもなく[26]，且つ Stewart の分類した Hawthorne の作品群に登場する Charcter Types の中にもそれに該当する者がない[27]，ということになると，決して看過できない問題を含んでいることが判る。そこで登場してくる問題は，Wakefield の性格を Hawthorne の他の作品と比べた時に，他の作品に登場する如何なる性格と類似点を発見できるのかという問題である。この点私の見た限りに於ては，僅かに Martin の述べた，Brown は Wakefield と同様に妻を見捨てたものである[28]という指摘のみが，記憶に残るにすぎない。ここで Hawthorne が Wakefield を Brown の場合と同様に "the good man" と一個所だけ記載している個所があるということ

も，一つの傍証として記憶しておいてよいだろう。

次に二人の夫が家出したのは，YGB に於ては，Hoffman によると All Saints' Eve[29] つまり10月31日の夕暮れ時だった，そしてこの夕べを "a Witches' Sabbath" としているが，W に於ても家出をしたのはある十月の夕暮れ時で，然も三・四日戻らぬかもしれないがおそらく金曜日迄には帰って来ると妻に言ってでかけているので，逆算すると，でかけた日はやはり安息日か月曜日位のところであろう。"Wakefield" という名に，荒野に目覚めた "Young Goodman Brown" の後身という allegorical anonymity を推定したいところだが，私としてはそれを根拠づけることができない。だが兎に角 Brown がでかける時は妻を信頼していて，帰宅した時点に於ては不信の念を抱いていた。ところが Wakefield は最初から妻を完全に信頼せず，不在中の妻の行為を偵察するという莫然たる関心，Schiller によれば妻の死を願う無意識の欲望[30]すらあったという状態で外出しているのである。いわば middle-aged Goodman Brown が Wakefield である。それ故に "simple" であった Brown に対比して Wakefield はその無気力にもかかわらず "intellectual" と定義されたのである。そして20年も不在した揚句の果に，風の強い秋の夜，露に濡れて目がさめた Brown と同様に，驟雨に打たれて，つい妻の許に帰っていくのである。Brown が放浪した一夜の森は，Matthiessen が精神分析学的吟味に堪え得るものとしてわざわざ彼の論文の一章の標題にした，Hawthorne 独特の sketch, "The Haunted Mind"[31] さながらに，"the haunted forest" と作者によって定義され，一方の Wakefield も殆ど一室から出ずに人目につく事をただ恐れるばかりであったというのであれば，Brown の放浪した森といい，Wakefield の蟄居していた一室といい，全く Hawthorne 好みの暗い心の象徴そのものであったと言えよう。ただ両者で全く異るのは，Brown の場合は "of all nights in the year" という時間の限定を夫妻相互に強く懇請或いは主張しているのに対し，Wakefield の場合は，気紛れに選ばれた一夜にすぎず，妻もその曖昧な約束の守られる可能性を十分には信じていなかったと思われる節があるという点だ。ところが，Brown は兎に角確実に約束だけは守り帰って来たのに対し，Wakefield はその曖昧な約束すら守らずに妻を遺棄したのである。そして更に無気味な迄に対照の妙を極めるのは，夫達が帰った後で，何れも夫妻共々長生きしたらしいが，Brown にあっては単なる長生きにすぎず，妻もその夫の死後，老残を思わせる "an aged woman" として生き延び，子供達や孫達が大勢呪われた者の葬儀に参列したということになっている。陰惨な夫婦生活の運命と，子や孫の存在は明かに矛盾しており，混乱しきったその後の Brown 家の価値体系の乱れを暗に匂わせている。之に対し Wakefield の方は妻の遺棄という悪事を働いて20年後に帰宅した時は，まるで "from a day's absence" にすぎなかったかの様に，すぐ縒りを戻してそして "became a loving spouse till death." となったというのである。一体現実の人間は心理学的にみて，不愉快な記憶は忘却しがちなものであるのに，Brown が若い時の不愉快な記憶を生涯持ち続けたというのは，Wakefield が特にとりたてていう程の理由もなく20年間蒸発していたという事実を上廻る程に不気味で，且つ不自然なあり得べからざる事件と言える。ところがともすれば YGB の批評は，一夜の事件の作者の光彩陸離たる描写に惑わされて，あの一夜の事件だけを精神分析学的手法で分析しようとする傾向はないであろうか。我々平凡人は決して異常な平凡人 Brown 程執念深くもなく，意志が強固でもない[32]。むしろ Wakefield の場

合の方が，現実に起り得る事件である，というのは我々平凡人は極めて意志薄弱で然も惰性に流され易いからである。よく引用される W の最後の moral を今一度吟味してみよう。

It is perilous to make a chasm in human affections; not that they gape so long and wide——but so quickly close again!

この一節をこの作品の要とおさえて but so guickly open again! と改作したら，どれ程不気味であることだろう。事実 Mr. & Mrs. Wakefield は Mr. & Mrs. Brown 程執念深くなく，すぐに縒りを戻したのだ。そしてこの様に徹底して愛しぬくことができないのと同じ程度に，徹底して憎みぬくことも出来ぬというのが，つまり徹底した不徹底という態度しかとれないというのが我々平凡人の常ではなかろうか。この点につき Doubleday が我々は Aylmer や Ethan Brand よりも Wakefield にもっと似ていて，それ故にその苦悩もより深刻であると説明[33]したのは十分納得できる。

Ⅲ

前節では主として，私は両作品に於ける plot の類似に焦点を当ててきた。だが Waggoner の言う通り，Hawthorne の「小説とは，意味を発見するために人生を探究する手段[34]」なのであったのだから，その技法の巧拙のみを論じても，Hawthorne 文学の核心に触れることにはなるまい。例えば Fogle の書いた "Ambiguity and Clarity in Hawthorne's 'Young Goodman Brown'" は，徹底して技法という視点のみから論じた論文である。彼は Brown の見たものは夢であったか現実であったかという aporia を，Matthiessen の "the device of multiple choice" を援用して，ambiguity という意味の問題として位置づける[35]。だが「曖昧性ということだけでは，美的原理（aesthetic principle）を十分納得せしめ得るものではない。[36]」という以上，どうやら美的原理だけが彼の価値評価の基準であることは明かである。その結果この作品に現れる Hawthorne の技巧を曖昧性の対立物として位置づけるという次第になる。即ちその技巧は明晰，構造は簡潔であると同時に古典的，確固とした絵画的手法に加うるに風土を生かした素材，之等は凡て対照の妙をみせて効果的に描かれ，然も作者自身は "detachment" の姿勢で "that reconciliation of opposites which Coleridge deemed the highest art[37]." を達成しているというのが彼の結論である。

だが，作者は Waggoner の言う通り現代の小説技術を知っていたわけではない[38]。作者自身が作品の中で，曖昧でなくはっきりと述べた様に，夢と思いたいならば Brown の体験を夢とみればよい，という作者の言葉を素直にとればよいのであって，丁度 Wakefield が誰でもよかった様に，夢とか現実とかの問題を realism の level や無意識の視点からのみ論ずることは，正確の様に見えるだけでその実正確ではない。Fogle は夜と昼，森と町の対立がこの作品の中にあるとし，ひいてはこの対立を悪と善との対立関係の反映とみた。私の見る所ではこの様な dualism は成立しない。作者は夜と昼・森と町・悪と善を同じ位置に

置き，monism の世界と見たのである。例えば "whether in church, bed-chamber, street, field, or forest" という表現に注目するだけでも明かである。又，YGB に於ける夜の描写は，どれ程光の，騒音の，又群衆の描写が溢れていることだろう。私は今ここで YGB に於ける明暗や音の対比を，Schubert の様に根気よく調査して論ずるだけの余裕がないが，少くとも彼が YGB の中に "harmony and melody" を聴きわけて，Beethoven の第九交響楽の如き古典的調和のとれた壮大な rhythm の世界に響えて得々としている[39]自信に対しては，作者の原文から "the *unconcerted* wilderness" (*italic* Unoki's) の一句を引用するだけで十分反論し得る。この森は現代の騒音に溢れた都市の imagery で充満しきっている。一方 Wakefield の滞在した London の町は，どれ程光に乏しく騒音が無く静まりかえっていることだろう。確かに，都会の喧噪の描写が皆無だというわけではないが，YGB に於ては都会的喧噪を極めた森がますます彼の行動を駆り立てたのに反し，W に於ては "he was delayed by the throng, in the very focus of a lighted lantern," という有様であり，10年後に群衆の中で妻と肌を接触しあって眼を見合わせても愛は復活し得なかった程に，London という大都会の無気味な沈黙と孤独が描かれているのである。

Hawthorne の主人公達は，一夜を過した後の Brown の様に堕落した後で，「自分が落ちこんだ世界をうけいれるか，そのいずれかを決めなければならない。これは倫理的現実についての決断であり」従って当事者達は二者択一の決断を迫られることになり，結局「村と森，都会と田舎[40]」の間を激しく移動することになると説いたのは Lewis であったが，確に Brown が一夜の体験を終了する迄はこれで説明ができる。然し彼が目覚めた後とか，そして又 Wakefield の場合ではその全生涯に亘って，決して二者択一の決断を迫られる様な眼が呟む様な Sartre の言う，所謂自由という刑罰を与えられていることを意識する迄に至らなかったのだ。覚醒後の Brown 又 Wakefield は最早全然決断をしない。二者択一の場合はそれが善・悪何れに向おうともその根底には意志の自由がある。ところが何かを意志することも意思しないことも自由であるという，所謂中世哲学者 Buridan の称えた任意の自由すら，彼等の手にあまるものであった。つまり質量の全く等しい二つの枯草の束の真中に置かれた愚かな驢馬が，どちらの草を食っていいのか判らず餓死したという Buridan's ass の譬え通り，覚醒後の Brown 又 Wakefield は行動したのである。

この様に考える時，Brown と Wakefield の行動に曖昧なものは何一つとしてない。Buridan's ass としての行動を曖昧とみるか否かは一に評者の定義による。Brown の行動を支えた原理は疑惑のみである。Descartes の「我思う故に我あり」に倣って言うなら，「我疑う故に我あり」である。更に Wakefield の場合になると，事態は深刻となり，「我思わず故に我あり」，否，「我思わず故に我なし」と迄定式化できるであろう。一体この意味のどこが曖昧なのであろうか。実に判然とした人間の定式化ではなかろうか。曖昧さがあるとすれば表現だけである。

それではそもそも覚醒後の Brown 及び Wakefield に描かれた一種の type としての人間像は，作者の世界観の中では如何なる位置を与えられていたのであろうか。作者が終始一貫この両作品で強調していることは，孤独な人間の姿に他ならぬと私は冒頭に於て More を援用しつつ述べたが，それが二つの作品に於ては孤独な巡礼者の姿として描かれているのである，この事実は注目しておきたい。即ち，夫も妻も，それぞれに孤独な旅を死に至る迄

	YGB	W
travellers	1	
traveller	11	
journey	3	2
journeying	2	
journey's		1

続けるのである。左表で判る通り，YGB に於ては旅の imagery が氾濫している。それも journey より travell の語彙の方が遙かに多い。前者が小旅行の趣が濃厚であるのに対し，後者は巡礼者的な，それも極めてアメリカ的に speedy な巡礼者という imagery が濃厚である(41)。Brown がでかける際に妻と交した言葉は何れも "your journey" 及び "my journey" という欺瞞的な言葉である。だが devil と思しい人物（以下 devil と略す）が登場してからは，しばしば travellers の用語が使われ，然も速力を速める為の手段としてはこの devil の持っている蛇と紛う杖が使われている。この devil の態度は慇懃そのもので，Brown に Goody Cloyse や聖職者達の悪しき秘密を垣間見させる時は，必ず Brown を単独の状態に置き，その自由意志に委ねるのである。誘惑者としての蛇(42)に紛う杖を持った devil は，同時に現代の speedy な vehicle の所有者としての知慧の symbol(43)である。この devil が消失した後では，ただ Brown は devil の与えてくれた "the maple stick" を vehicle にしたてて，始め "the narrow path"(44) を，最後は遂に途なき荒野を押しわけて，単独で疾走しなければならぬのである。つまり最早 devil ですら同行して援助することはできない。彼とこの devil との関係は，この devil が消失する迄は "the elder traveller", "this fellow-traveller", "his companion" はては "the pair" と表現されるようになるまでにその親密さは高まるばかりなのだが，一たん消失したとなると Brown だけが唯一の "the traveller" ということになり，果ては Faith との劇的な邂逅の場面に於ては，Brown と Faith のみが "the only pair" であったということが示されるに至る。即ち Faith も又，孤独の人であったわけであり，このことは既にこの作品の冒頭に於て，Faith が夢を見たという事実の方が先に，然も再三繰り返されていることからしても明かである。我々はともすると Brown が主人公になっている物語だとばかり思いこんでいるきらいがあるが，この冒頭部を考察すると，一面では Faith が夫の行為を疑った物語，乃至は Fogle 流に言えば Faith の見た夢(?)として判読し得る可能性もあるということを示しているのだ。W に於ては逆に travel という言葉が一回も登場してこないという事実が，極めて比喩的な意味を持っている。冒頭部に於て早くも，単なる journey にすぎぬのに "under pretence of going a journey", と断わらねばならず，然もそれが忽ちにして "his journey's *end*" (*italic* Unoki's) に辿り着いて，以後ただの一回も travel が試みられたことはなかったと言っているのだ。つまりどのみち巡礼者ではあり得なかったのである。Mrs. Wakefield の場合も同様である。一生夫を疑惑の眼で見つづけた Faith と違って，10年後は "well-conditioned woman" になりおおせていて，更に20年後は楽しげなダンスを踊っていたとは，奇怪と言えば奇怪至極である。然しあまりにも執念深すぎる Mr. & Mrs. Brown よりも，あまりにも忘れっぽい Mr. & Mrs. Wakefield の方が，遙かに現代人の孤独を言いあてている。20年後に Wakefield に映じた夫人の姿が "a grotesque *shadow*" (*italic* Unoki's) であったとは，Gervayse Hastings の姿すら彷彿させるものがある。彼等は『死に至る病』(Sygdommen til Døden) に於ける

Kierkegaard の言葉を借りて言えば，自らが絶望であることを知らない，従って最も低次の絶望に陥った者であった。そういう意味から再考すると，YGB に於ける登場人物の方がまだ遙かに幸福であった，というのは少くとも彼等は神を意識し，然も神を意識しながらも神を信頼しえぬ己れについて絶望していたからである。今一度 Kierkegaard の言葉を借れば少くとも，絶望は罪であるということだけは自覚していたのであり，そしてこのことは YGB の結末部に於ける "a distrustful, *if not a desperate man.*" (*italic* Unoki's) にありありと伺われるのである。実に，悪魔の洗礼の儀式に於ける最大の立役者である至高の "the figure" 自身ですら "despairing awfulness" に打ち沈んでいたのである。

注

(1) Paul Elmer More, "The Solitude of Nathaniel Hawthorne," .Daniel Aaron, ed., *Shelburne Essays on American Literature* (1908; rpt. New York : Harcourt, Brace & World, Inc., 1963), p. 110.

(2) *Ibid.*, p. 112.

(3) *Ibid.*, p. 121.

(4) Paul Elmer More, "Hawthorne : Looking Before and After," Daniel Aaron, ed., *Shelburne Essays on American Literature*, p. 126.

(5) P. E. More, *op. cit.*, p. 125.

(6) Elizabeth Lathrop Chandler, *A Sludy of the Sources of the Tales and Romances Written by Nathaniel Hawthorne Before 1853* (1926 ; rpt. Folcroft : The Folcroft Press, Inc., 1969), p. 56.

(7) *Ibid.*, p, 58.

(8) P. E. More, "Hawthorne : Looking Before and After", p. 129.

(9) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne : A Critical Study* (Cambridge & Massachusetts : The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1963), p. 92.

(10) Hyatt H. Waggoner, *Nathaniel Hawthorne* (Minneapolis : Univ. of Minnesota Press, 1962), p. 17.

(11) Malcolm Cowley, "Hawthorne in Solitude," *A Many-Windowed House* (1948 ; rpt. Carbondale & Edwardsville : Southern Illinois Univ. Press), p. 11.

(12) Richard H. Fogle, "Ambiguity and Clarity in Hawthorne's 'Young Goodman Brown'," *New England Quarterly*, XVIII (December, 1943), 448-65. この論文の中でも "the goodman" という語法が2回でてくる。即ち450及び460。

(13) 例えば *Ibid.*, 449. 或いは Neal Frank Doubleday, *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* (Durham : Duke Univ. Press, 1972), p. 209.

(14) 例えば "Ps", 25-7, *Old Testament* 及び "1 Tim", 4-12, *New Testament* を参照。

(15) H. H. Waggoner, *Hawthorne : A Critical Study*, p. 92.

(16) *Ibid.*, p. 100.

(17) Andrew Schiller, "The Moment and the Endless Voyage : A Study of Hawthorne's 'Wakefield'," *Diameter*, I (March, 1951), 12.

(18) H. H. Waggoner, *op. cit.*, pp. 60-61.

(19) A. Schiller, *op. cit.*, 7.

(20) R. H. Fogle, *op. cit.*, 463.

(21) 例えば H. H. Waggoner, *op. cit*, pp. 75-76. 或いは N. F. Doubleday, *op. cit.*, pp. 151-152.

(22) Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne : An Introduction and Interpretation* (New York : Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1961), p. 48.

(23) *Ibid.*, p. 49.

(24) N. F. Doubleday, *op. cit.* によれば "Wakefield" の場合は p. 152, "Young Goodman Brown" の場合は p. 202 にその source が与えられている。

(25) A. Schiller, *op. cit.*, 7.

(26) H. H. Waggoner, *op. cit.*, pp. 74-75.

(27) Randal Stewart, "The Development of Character Types in Hawthorne's Fiction", Randal Stewart, ed., *The American Notebooks* (New York : Yale Univ. Press, 1932), pp. xliv-lxvii.

(28) Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (New York : Twaine Publishers, Inc., 1965), p. 93.

(29) Daniel G. Hoffman, "Just Married!-In the Villages of Witches," *Form and Fable in American Fiction* (Oxford Univ. Pres, Inc., 1961), p. 150.

(30) A. Schiller, *op. cit.*, 9.

(31) F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (New York : Oxford Univ. Press, 1966), pp. 229-241.

(32) 現実に存在する患者を治療する為の作業仮説としてたてられた精神分析学の理論を，現実に存在せぬ romance の分析にあてるのは，romance が事実の反映でない限り無理を伴う。作品論よりも，むしろ作家論に有効であろう。

(33) N. F. Doubleday, *op. cit.*, p. 154.

(34) H. H. Waggoner, *Nathaniel Hewthorne*, p. 19. 斎藤光氏の訳文による。

(35) R. H. Fogle, *op. cit.*, 449.

(36) *Ibid.*, 454.

(37) *Ibid.*, 464.

(38) H. H. Waggoner, *op. cit.*, p. 19.

(39) Leland Schubert, *Hawthorne, the Artist* (New Xork : Russell & Russell Inc., 1963), p. 117.

(40) R. W. B. Lewis, *The American Adam* (Chicago & London : The Univ. of Chicago Press, 1955), p. 113. 斎藤光氏の訳文による。

(41) Mitford M. Mathews, ed., *A Dictionary of Americanisms On Historical Principles*, Vol. II (Chicago : The Univ. of Chicago Press, 1951), p. 1765を参照。"travel" は "A gait of a horse." とされ，"traveller" は "An itinerant preacher." の用法がある。

(42) 例えば "Gen", 3-1, *Old Testament* を参照。

(43) 例えば "Mt", 10-16, *New Testament* を参照。

(44) 例えば "Mt", 7-13, 7-14, *New Testament* を参照。

Summary

Young Goodman Brown Metamorphosed into Intelligent *Middle-aged* Wakefield but in Vain

Keijiro UNOKI

Let me state my method first. I can't agree with Fogle's method that seems to estimate Hawthorn's pieces only from "the aesthetic" point of view. I am rather in sympathy with Waggoner's attitude that regards Hawthorne himself as a kind of existentialist, for the reason that Hawthorne's intention in his fiction "was a way of explornig life to find *meaning*." Therefore the thesis I am going to deal with is not about the style nor the aesthetic texture but about the meaning of Hawthorne's two short stories. Young as Hawthorne was, to quote More's phrase, he had a keen insight into "the stress of youth" and "the feebleness of age" in *Young Goodman Brown* and *Wakefield*, which, to my astonishment, were published in the same magazine almost successively. Then did two heroes, Goodman Brown and Wakefield, act in the wilderness of the forest or of London in the same way? Superficially speaking, Goodman Brown's overt conduct bears resemblance to Wakefield's reserved one. They abandoned their beloved wives, their departures from their faithful wives happened in the evening of autumn and came back to their homes at all events.

But the true import of their conducts should not be dealt with from the points of superficial similarity. First, the interval of Brown's absence is different from Wakefield's. In the case of Brown it must be restricted in one night and that restriction of absence was based upon husband and wife's mutual agreement. In the case of Wakefield, though his interval was announced to his wife "under pretence of going jouney", Mrs. Wakefield was very doubtful of "the length of his jouruey", of "its object" and of "the probable time of his return." Secondly, Brown kept his promise after experiencing a terrible nightmarelike evil meeting, while Wakefield didn't, postponing his coming back capriciously day after day——indeed for twenty years, because he was "the man of habit". From the above-mentioned data of their behaviours, one is inclined to conclude that what Wakefield had experienced during the twenty years has more connotation than what Brown had experienced during the night. It is not right. Brown travelled as a solitary *traveller* "in relation to the whole situation and set of circumstances" through the midnight forest, which was abundant in urban imageries——such imageries as picturesque lights, sonorous sounds and the evil figures with whom Brown himself

had familiar acquaintances. But for Wakefield, a seclusist "without a proper distinction of circumstances", London was only a solitary wilderness to live in. No sooner had he begun his journey, than he came to his "journey's end". And since his arrival at his terminal, never could he become a solitary *traveller* in the true sense of the word. Next question: why was young Goodman Brown still "*young*" after recognizing the miserable truth of human evils? Waggoner says symbolically Goodman Brown "grows old in bitterness", but his experience in the forest or his advancing in age never means his becoming clever and intelligent, he only remaining "a distrustful, if not a *desperate* man". To me, "an aged woman", Faith herself doesn't seem happy either, because when she followed Brown's "hoary corpse", assuredly she was one of those who couldn't carve "no hopeful verse upon his tombstone". She who dug a pit for her husband fell in herself. Wakefield is the reverse of Goodman Brown. He was already "intelligent" when he began his journey, but the result of his journey was completely meaningless and absurd, he not being able to become even "a distrustful" man, needless to say never "a desperate man". The most terrible meaning of *Wakefield* is well depicted in Hawthorne's moral, which declares that "It is perilous to make a chasm in human affections; not that they gape so long and wide but so quickly close again". This phrase is so often misunderstood in spite of the fact that Mr. and Mrs. Wakefield "became a loving spouse till death". In this sense, *Wakefield* is a more terrible story than *Young Goodman Brown*, up-to-date enough, sufficiently making up for his simple allegorical rigid style. Therefore we can say the destiny of Goodman Brown and Faith be more fortunate than that of Mr. and Mrs. Wakefield; because while the former could be doubtful of his or her spouse's sincerity, in other words, of the existence of the celestial world; the latter couldn't recognize even their miserable position, being "the Outcast of the Universe."